



句餘別
色翁翁撰

中村俊定文庫
文庫 18
275



二
七
何

色蕉翁負享送稿

寬保
梓行

句餞別

自在菴跋

書
文叢堂

句餞別目錄

昔景詩
無所深

山口素堂詩三絕

外一絕

際定藏

友松二四六八十言鄙詞

岚蘭聯句

遊園堂露沾公和歌一首

安適和歌二首

素堂不卜二唱 惣餞別二十六句

其角岚雪二唱

歌仙一卷

癸句 露沾云
口キ 名色紙箱

翁ノ附合不才他唯之

十八句

半歌仙
ナリ

癸句 濁子 松翁ナリ

十句

表八句
ウフ四句

癸句 松江 松翁ナリ

十句

同歩

癸句 峯白 松翁ナリ

沾化僕吼雲口號一句

以上

附篇

芭蕉翁師家之系



芭蕉老人有故赴鄉國老人常謂他

鄉即吾鄉今猶莫作戲斯語 吾何不

信斯語乎因綴早語三絕以投頭陀

其一

契金
素堂山子

君去蕉庵莫止鄉 故人多處即成鄉

風飡露宿豈勞意 胸次素無何有鄉

其二

弱筮瘦筇寄一身 離筵回首惱吟身

河邊楊柳無由折 早動翠條迎老身

其三

陰月稱陽又小春 小春又那似陽春
舉盃皮裏陽春在 為唱陽關一曲春

奉送芭蕉翁赴于故鄉

養全 桐山正堅

東西兩地學參商 獨向北風伴雁行
汲汲浮生如一夢 皈鄉來日報平康

餞別二四六八十言鄙詞不章故旁

點

友松政宣稿

霜散テ 道鼎ナ 杖直メ 穿影ヲ 笠曲ツク 戴晴ヲ

君往伊州別業 我留江府金城 冬

夜長雲長幽夢破 逸興飛雪飛佳句

成ニ 歎テ 枕尚ラ 宜聽レ 處處寒山寺 日和ニ

脛キ 輕ク 得天倫娛樂情ヲ

昔貞享四丁卯歲十月廿五日

るれたつて帰るるを返りてたつ

嵐蘭

家らの裳——ほんるれを

ちをいするるるるるるるるるる

俳諧をのふ

丁卯初冬日

全人拜稿

分袂隔西東

送君小橋側

動風岸上柳

遙想多病軀

飄然一囊子

顏節萬里雪

管根山巖巖

登峻強莫步

無事到故國

佳景幽勝地

散霜林下楓

長路豈無艸

句丈任天工

破笠孤村衆

大井川洪洪

臨水亦乘驄

先傳平安裏

只恐久認蹤

從今花與月

餞別

獨吟望蒼穹

遊園

~~~~~

曰

安適

~~~~~

詠別

曰

~~~~~

よ

素堂山子

もろのうしぢく奥のひやうれ

ネト

留もれらうにやめへしおのこ果

杉凡

ぶきも富をえんくれけん奴

仙化

傍もくへんよへてあかんちあはれ

心鯉

義出もろすを鳴くんまの居

而己

こまや街のあつ波のあ

ちり

よも月ひれまあかん一らん

糖凡

山崎のついでに

書下

あつた乃紙小やねもふたねのあつた

松尾

張屋のついでに紙小ニツ

あつたのついでに  
あつたのついでに  
あつたのついでに  
あつたのついでに  
あつたのついでに

紙小のついでに

ついでに

文麟

あつたのついでに

漢石

あつたのついでに

東來紫氣

曾良

俳諧説て

釋

宗波



ふもを曉あけしそめの草一枕

沱芹

あまやちまふまふらん梅のふ

苔こけ翠すい

ふれしそまふあまののま

又菊

あまふあまふあまふらんそめよみ梅うめ

凡泉

あまやあまふあまふあまふらん

水みづ坪つら

あまふらんそめをわらひりそめ梅

翠すい桃もも

あまふあまふあまふあまふらん

あまふ

あまふあまふの脛むねわらひ梅うめあまふらん

由よし

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

孤屋

十津の綿をさうのしきとまほぢ

如泥

宿るれまほしきよらぬよあや

露草

書<sup>蒲團</sup>をさうす女もあし旅のや

ト子

旅毎に海をさうのしきとまほぢ

飯

さうのしきとまほぢ

旅

旅のしきとまほぢ

こと

嵐雪

風さうのしきとまほぢ

具角

みづねのさしあがり着軍や一たのま

能譜奇仙

後派のまきまき舞くましのくまのま

かへりなま

露沾

かき秋吉のまきまき旅のま

後派のまきまき舞くましのくまのま

は後よ川田の歌のまきまき

1. 2. 3.

あまらるるまきまき一軍川のま 具角

くろくろくまきまきまき 後派のま 露沾

まきまきまきまきまき 後派のま 露沾

傘のまきまきまきまき 後派のま 露沾

あまらるるまきまき一軍川のま 具角

あまらるるまきまきまき 後派のま 露沾

あまらるるまきまきまき 後派のま 露沾

あまらるるまきまきまき 後派のま 露沾

賢あつ 傳に待つてせや

あつて 傳に待つてせや

あつて 傳に待つてせや

あつて 傳に待つてせや

あつて 傳に待つてせや

あつて 傳に待つてせや

あつて 傳に待つてせや

あつて 傳に待つてせや

品

伝

品

品

品

品

品

伝

響うらうらうらうら

響うらうらうらうら

響うらうらうらうら

響うらうらうらうら

響うらうらうらうら

響うらうらうらうら

響うらうらうらうら

響うらうらうらうら

伝徳

品

品

品

品

伝

品

品

大いなるうらなひのちを掃一 ぬ

ふりゆく時の輝きをかきとめて 治

獨り居るを編くしす 一書 セカ

一軸の所見の通る藤のまき 男

名も能くしす 藤のこころ 治

西へけて鏡よむいよ男つと 蓮

こころをのほらうし 柳のまき セカ

裾織花の端のわさをかして ぬ

柳の水のよきくさ 執筆

十八句

濁子

江戸橋らのまき いこ

さきほのちおん 芭蕉

貝ひろら 嵐雪

酔て 具角

あふの笑のり ぬ

根松苗杉 子

池の傍はし好ぬ垣はく  
これと入杭のいふや  
おのちよ書にのれいふの細  
妹うかづらのかゝるいふ  
うさよ袋の切のさうしに  
いふをいふく圍の丸ん  
隣の園のおつたいふ  
二舟いふいふいふ  
侍  
角  
子  
子  
子  
子  
子  
子

一草の連をいふいふ  
苗代もいふいふ  
踏の草のいふいふ  
休を下りかゝるいふ  
十句  
松江  
きぬいふいふいふ  
一ぬいふいふいふ  
粘草にいふいふ  
子  
子  
子  
子  
子  
子  
子  
子  
子  
子

田中のるるのまをりられり  
 月ほろくをのぶおきさるれ  
 秋凡とる門のやーと  
 露の糸端をさるるす  
 菊のさそ綿  
 猿杓女あるじの情おろく  
 傾城しきをかくすゆほの

依こ  
 泥芥  
 水萍  
 風泉  
 夕菊  
 苔翠  
 執筆

十句

何処くに澄よりをん葉の宿  
 火煙の紫に陀を次人  
 松風よるさるる鶺鴒をんので  
 秋気はらうふ湯のふの月  
 待一うさふようふ秋のあ  
 昔の繩向をゆるさふみ  
 徒ももるるさるるもの名を

茶白  
 龜  
 漢石  
 コ女  
 キ角  
 ト千  
 尾名

餅二つとよきやうに常  
昔も大いふん子りのねひん  
誰うぬーとて餅すま  
石 魚 白

州庵乃抄すまの  
仙化僕  
吼雲

跋 自在菴 祇徳記

八雲居抄よしく説法歌是六の巻をいふ  
おうあしんまもい換あふる一に何れかと  
も不立之而無後きたるとんさるるありあり  
らん後拾遺中にも載集りも入るる  
歌あつたその換あふる一末代人非可定  
とつたより今も説法歌をこの巻の巻  
稀也とつたは名世よひるるもあつた



事ハその連統のついでありて連歌の志ヲ也  
 うる後家よとれをみる祝世新子能は  
 宗鑑  
 美しきものなりしよこの新子  
 みさうりありて國ゆゑるやもいふありて  
 ゆく事貞徳道を行く色産句と  
 のい千載不朽の一哭とありては歌連統の  
 四家とらるるなりしや三傳の  
 名家をその中よ三代宗道とありて

三代宗道之系

祖

貞徳

松永氏 長頭磨 延陀丸 道遊軒

又永種七方より東初子の頃をみる多能  
 々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

心を歌林に寄思と凡騷に覃を先後目し  
 常子木蓮乃於柄をもちり  
 妙法院法門主より大佛の脇より地盤を  
 破して若九屋を建てる吟花廊といふ回廊は  
 本館奥をあらはれり又桃園柿園櫻戸  
 あり 兼應二年十月十五日九十四歳而卒  
 治承下智相実おもふ事寛保四年九十二年

季吟

北村氏法眼 拾穂軒 再昌院法印

宝永二酉六月十五日卒 齡八十二

京都池ノ端 正慶寺ニ葬ル

近江の季吟にて初雅の法を習り醫術を學ぶ  
志慮庵と号す。然正章強きを凌ぐ能はざり  
そのころ子孫の法を自ら傳へ門下入り  
歌學も長し。古歌を以て六卷の抄を著す。その  
かなは東都より法を賜ふ

嫡子湖春元禄十丁丑正月十日卒 自述季吟  
同日より卒す

○西山宗因より小徳士自述を看破し  
一池を達するに終身凡そ

中貞開祖

夕陽別、撰者

松尾氏 桃青 凡羅坊 泊船堂

芭蕉

元禄七年十月より病疾を病み旅に死す  
寛保四年より五十二年より

伊州人仕府主君而有忠勤學才秀發懷出塵志故  
解紐斷髮永成隱士性好凡雅師北季吟幾乎得  
其一體也

そとて免法身も長し後子省破しそ終極の  
本懐を極めしそ凡の一身を達する天下を  
説法中貞の開祖とあはくとも佛宗八家の祖  
師のそとて門人三千よりありしそ

其母あはれなりけり翁の孫は  
るるあはれなりけり翁の孫は  
後孫はあはれなりけり翁の孫は  
るるあはれなりけり翁の孫は

寛保四年甲子春正月



書母

川村源太郎門

十六

